校友時報

昭和60年7月20日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塚2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

第26回能高祭
見た!!創造の世界

新企画高評価を得る

前夜祭を含めた六月二十八日から三日までの三日間、第二十六回能高祭が行われた。今年は、創立六十周年ということもあり、その三日間の能高生の動きは、目を見張るものがあった。テーマ「破天荒」―いま創世の時代―のもと行われた今回は、新しいイベントもいくつか見られ、マンネリ化の傾向にあった能高祭に新しい風を吹き込んだ。

二十八日の前夜祭では、ブラバン演奏、の抗ど自慢が行われた後、フォークダンスが行われた。あいにくの雨であったが、全ての人が、歌い、踊り歓声を夏の夜空に響かせていた。

各部門での三年生の活躍は目覚しく、最後の能高祭をおもいきりエンジョイしようとする光景が、いたる所で見られた。

な お各種部門の結果は次の通りである。

▽HRデコ
一位　三C
FANTASTIC WORLD
二位　三G
CARLFORNIA PARTY!!
三位　二H　人生相談と占い
▽壁新聞
最優秀賞　三A　鳳雛
優秀賞　一F　涼風詩
一F　澄晴
大衆賞　三A　鳳雛　三D　篝羽
▽仮装
一位　三E　公共広告機構
二位　三B　水中の美「私は踊る」
三位　二H　ウルトラファイト85
▽高塚ジャンピング
○十人の部
一位　一E　近藤琴美チーム
二位　一E　三熊仁チーム
○十五人の部
一位　三F　高橋徳チーム
二位　一E　鍋谷裕之チーム
○五十人の部
一位　三E　佐藤守チーム
二位　二F　加賀裕一チーム
▽ウルトラクイズ
一位　一B　木本雄吾
二位　一C　関克彦

聞く態度に良識を

先頃、全校生徒を対象に部説し、進学講演会が行われたが、生徒の聞く態度が際ぐ非常に見苦しい状態のまま終わってしまった。講演が行われているあいだ、隣の人と話をしたりいねむりをしていて、まさに能高生の醜態をさらけだす結果となった。

能高生の「人の話を聞く態度」は集会がある度ごとにわかる通り非常に悪いものである。特に三年生の態度には目に余るものがあり、先生方もいつも注意しているが手に負えなくなっている。今回の講演会にしてみても三年生は半年後に大学入試を控えているとは思えない態度であった。

能高生の「聞き手」のもう一つの例として、「チューコール」が挙げられる。何か気にくわないことや意にそわないことを言ったりすると、相手かまわず「チューコール」と一声かける有様だ。ただでは言立たないためにそうやって自分の存在を誇示しているのかもしれないが、それでは話し手に対してあまりにも失礼である。人の話を聞くあたって話を聞かないというのは最大の侮辱であるが、能高の場合は話し手に対して「やめろ」と言わんばかりの態度であるからもっと許せないのだ。この能高生の「聞き手」によった状態では、能高生は体はかりが大人で中身は小学生と言われても仕方がない。まさに間としてかたわと言っても過言ではないのだ。

ところで「チューコール」というのはいつから本校が一番ひどいものらしい。能代・山本地区の他高校はこのような傾向は一部を除いてあまり見受けられないそうである。また高校生にもなったら人の話を聞けるというのは当然なのだから、他校で見受けられないといっても不思議ではない。それだけ能高生が幼稚なのかもしれない。この「チューコール」、いつから始まったかは定かでないがだんだん伝統化してきているからこのような恥ずべき伝統が、これからの能高生に受け継がれていくかと思うと先が思いやられる。

今年本校は六十周年を迎えるにあたり、九月には講師をお招きして講演会を開くことになっている。しかし能高生がこのまま状態であるならば、進学講演会の二の舞になるかねないのだ。そうならないためにも、能高生一人一人がもっと自覚を持ってもらいたいものである。

60周年記念 事業計画発表される

今年九月、本校は創立六十周年を迎える。現在それに向かって記念諸事業の計画も着実に進められており「今年は、六十周年なのだ」という雰囲気が、学校全体に漂いはじめている。

さて、その記念事業についてであるが、生徒の父兄、同窓会員らによって構成されている教育振興会を中心に、教職員、事業に賛同して下さる方々を事業の進行者として、総費用千二百八十万円を費やした立派な事業が行われる予定である。

その諸事業の中で、一番重要な意味のあるものとなっているのが、費用六百万円を費やした、松の並百本の植樹である。これは、本校の校風である「松稜」にちなんだもので「この六十周年を、たんなる一時的なものではなく、後々まで本校にとって真に価値のあるものであってほしい。」という諸事業の中核として推し進められている。

その他の主な事業には、十月三日に行われる予定の六十周年記念式典や、記念講演会、記念誌の刊行などがある。そのうちの記念講演会は、日本サッカーチームが、メキシコオリンピックにおいて三位入賞を果たした時の監督で、現在、日本サッカー協会に所属しておられる岡野俊一郎氏を講師に迎えることになっている。また、記念誌は、六十年間の出来事、思い出などをつづる「回想録」、歴史をたどってゆく「沿革史」などを、費用三百五十万円を費やして編纂する予定である。

このように、行われる記念事業は、いずれも内容の充実した立派なものであり、本校の歴史に新しい一ページを重ねるものになろう。

私大難化を力説

去る六月十日（月）の五、六校時に、進学講演会が行われた。この行事は毎年行っているもので、今年は進学の鈴木裕氏を講師として開催された。今回は、六十年度の入試の結果をふまえた今後の勉強の仕方についてのアドバイスが主な内容だった。

鈴木氏は、「有名な私立大が難しくなってきているだけに、英語に重点を置いて勉強しなければならない。また私立大と国立大の並願はかなり難しい。」など私大難化の現実を力説された。

この会の趣旨は「大学入試というものを真剣に考える」ということであった。大学入試が現実的問題として迫っている三年生の中には、真剣な表情で聞き入る人も見られたが、総じて一、二年生に、また大学入試が実感としてわからないらしく、全く無関心だというようにとても私語が多く、居眠りをしている人さえいた。このことについては進路指導の藤田先生も「一、二年生の態度があまりよくなかった。進学講演会は三年だけのものではないのだから、一、二年生は、大学入試をもっと積極的に受けとめるために、もっと真剣に聞いてほしかった」とおっしゃられた。

秋大説明会 秋大の認識を深める

七月八日秋田大学説明会が教育学部教授（英文学）の小松元也先生と鉱山学部教授（電子工学）の成田裕一先生をお招きして一時間あまり行われた。この会は秋田大学にもっと認識を持ってもらい、また専門家から英語の勉強法を教わることを目的として行われたもので、教育学部（視聴覚室）に約七十人、鉱山学部（会議室）に約三十人の三年生が参加した。

教育学部の小松先生は、「共通一次では基礎力が大切だから基礎をキッチリとやってもらたい。また英語の長文読解には、意味をメモしていくのが大切だ」など、受験や英語の勉強法について説明して下さった。

また鉱山学部の成田先生は、「電子・電気の就職に関しては一人に対して四つの企業がくるので好きなところに就職できる。また二人に一人は留年する。」など、就職状況や授業の厳しさについて説明して下さった。

また参加した生徒もメモをとるなどして熱心に説明に耳を傾けていた。

劇本校は「黒い太陽」を上演

去る六月二十三日、二ツ井町の福祉会館で春季合同演劇発表会が行われた。出場校は、能代工業高校（雪女風土記）、二ツ井高校（ひるめし）、能代北高校（静かな海―いつか来た道―）、能代高校（黒い太陽）の四校であった。

今回の発表会では、各校とも公演終了後、会場の人に感想を聞くという新しい趣向を取り入れたなかの好評を得ていた。

本校が上演した「黒い太陽」は、戦時中に同親をとし祖母に引き取られたマリが、肌の色が黒いという理由で周りから白い目で見られながらも、毎日を一生懸命生きている様を描いたものである。特に涙を流しながらの迫真の演技は観客の涙をさそった。

顧問の武田先生は、「今回は一年生と二年生が主流となり、三年生がアドバイスをしたものであるが、ますますのできであった。今、全国的レベルが非常に高いので、これからももっと研究する必要がある」と語られた。

出来事

献血

六月二十七日、献血車が来校し、百三十五名（二年生七十六名、三年生五十七名、職員二名）が献血した。

今回は、一年生の献血者がいなく、全体数も昨年に比べて少なくなった。これは全校生徒の約二割にもみたず、協力しようという意識が年々ひくくなっているあらわれとみられる。もう少し、生徒一人一人が進んで協力するという態度が望まれる。

講話

七月九日二校時、能代署交通課長の長沢三男氏を迎え、毎年恒例の交通講話が行われた。今年の交通事故による死者が、例年に比べ異常に増加しているという話を皮切りに、高校生の無謀運転による事故、「自分は大丈夫」という考えの人々の多いことなどの点が指摘された。

毎年言われていることだが、講師の方の熱心な態度に反し、講話の途中、講師の方に注意を受けたりする人もいるなど、聞き手側が目立っていた。交通マナーと共に、日常的なマナーの向上も望まれる。

窓の節季

夏の野を自在の姿走り行く
林田　民男

高塚の夏。能高生は元気に走って行く。その姿は自在でのびのびしている。

三点

▼ナ属ーすべて北半球の温帯に自生する。日本では、ブナとイヌブナが知られていて、本州中部以北の六〇〇メートル以上の山地に生え、高さ三〇メートル以上の大木となる。そしてブナは、日本の温帯の自然林の代表的植物である。また、材質が硬く、きめ細かいので、船材、鉄道枕木、家具などに広く利用され、最近ではパルプ用材としても重用されるようになった。▼このブナの原生林が、昨今伐採の進行で全国的な危機が叫ばれている。そこで、将来のあり方などを考えようと、日本で初めての「ブナ・シンポジウム」が、先日の十五、十六日、秋田市で開催された。▼このシンポジウムの中心になっている白神山地のブナ原生林も、林道の開設のために多数の樹木を伐採する計画が進められた。そこで、ブナ原生林の保護を求める人々が一斉に立ち上がったというわけだ。▼今回のシンポジウムでは、「自然保護」というのは、自然を常に豊かな状態に保全し、その資源を枯渇させることなく、より高度に活用、そして豊かな状態のまま次の世代に手渡していくことだ」と言われた。▼今私たちは、このブナ原生林と共に、自然について再度考え直す必要があるのではないなろうか。▼古代、人類は自然と共存していた。しかし、文明が進むにつれ、自然をほしいままに、乱開発を繰り返してきた。その結果現在、人類は自然の逆襲を受けている。公害はその一つと言えよう。▼パネラーの一人の言葉を借りると、「私たちは今こそ古代の人々の世界観で現代文明を反省する必要がある。そして、一本の木を切ることは一人の人間を殺すのと同じという自然への恐れを知ることが大切である。」ということが言える。▼これらのことを教訓に、私たちはもっと自然を深く考え、これ以上破壊することなく保存、共存していける道を見つけていくべきではないだろうか。